

ある国際学会で

共通教育主管 奥田一雄

今年の夏は、早期に訪れた2つの台風によって一気に本番に突入しました。天気予報では、台風は発生(誕生)し、発達(成長)し、そして消滅(死滅)する、と表現されます。生物の一生のようです。戦後しばらくは、アメリカ占領軍の影響からか、台風はカスリン台風、ジェーン台風などのように女性のなまえがつけられていました。

これら2つの夏台風が到来したそのあいだをぬい、私は筑波で開催された藻類(そうるい)学のアジア太平洋国際学会に参加しました。わが国をはじめとし、韓国、中国、ロシア、インド、フィリッピン、タイ、マレーシア、シンガポール、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカなどさまざまな国々から藻類を研究している人々が一同に会しました。

一般に、国際学会は密なタイムテーブルを組んでいますが、考えようによっては逆に余裕ある日程で進められます。

学会前日は終日参加者が三々五々会場に訪れて受け付けを済まし、夕方には、久しぶりですね、お元気でしたかとお互いに挨拶しあう簡素なウェルカムパーティーがあります。学会は5日間。オープニングセレモニーから始まってプレナリーレクチャー(基調講演)、シンポジウム、そしてポスターセッションを含むお決まりの形式で行う研究発表と討論が朝の8時から夜の7時まで続きます。なかび3日目は、丸々エクスカージョン(遠足)にあてられます。今回は、大洗海岸での海藻採集、植物園または環境研究所の見学という3つの選択コースが用意されました。4日目の夜はバンケット(懇親会)。参加者それぞれ研究の話や各国のよもやま話などで仲良く談笑し、筑波名物のひよっこ踊りのアトラクションもあり、大いに盛り上がりました。最終日には、クロージングセレモニーにおいて、今回の学会で優秀な発表をした方々に対して賞が授与されました。

この学会は、学生(大学院生)が発表して互いに競い合うステューデントコンペティションを恒例として行っています。研究分野の異なる2つのグループ

で、それぞれ 13 名の学生が、クロージングセレモニーで授与される優秀賞をめざして 15 分間のオーラルプレゼンテーション（口頭発表）に臨みました。

私は一方のグループの 5 名からなる審査員（韓国，マレーシア，アメリカ，中国，日本）の一人でした。審査員各自が学生の発表を聴いてエバルエーションシートに評価の点数を記入します。評価は 10 項目にわたり，研究のバックグラウンドをきちっと説明できているか，適切な方法で実験がなされているか，結果を論理的に導き出しているか，研究の質と意義が高いかというような研究それ自体に関係するものから，話していることがわかるか，質問が理解できるか，質問に対する応答が妥当であるかなど，発表の状況や態度までを含んでいます。

日本人学生による 6 つの発表，韓国から 3 つ，ロシア，オーストラリア，フィリピン，インドからそれぞれ 1 つの発表がありました。その後，審査員が集まって評点を集計してランクづけし，議論したうえで優秀者を決めました。最優秀はオーストラリア，優秀は韓国とフィリピンの学生となりました。

ステューデントコンペティションにおける日本人学生に対する私の印象は次のとおりでした。日本人学生のプレゼンテーションは適切なスライドを用いて話も分かりやすく，研究内容は優秀者を凌ぐほど高いレベルです。しかし，発表後の質疑応答でまさしく右往左往しています。たとえば，「何回その実験をしましたか」，または，「あなたの研究の目的をもう一度言ってくれませんか」という質問に対し，応答する以前にその質問さえ聴きとれない場合があります。国際学会で使用する言語は英語です。

この 7 月，文部科学大臣は国民の英語能力を伸ばすための戦略構想を発表しました。一例を挙げると，中・高の教員に求められる英語力として TOEIC でなら 730 点を目標とする施策を具体化するということです。また，同時に，国語教育の充実も戦略構想に盛り込まれました。

本学共通教育では，学生諸君が英語と日本語を実地で駆使できる機会と環境をさらに拡大していく工夫が必要であると認識しています。2 学期が始まるにあたり，思考，理解，意思伝達，表現，文化などの面で言語が果たしている役割について，みなさんそれぞれ考えを巡らせてみては如何でしょうか。